

第1特集

ジェネラリストの アレルギー診療

総合診療としてのアレルギー

アレルギー疾患は、花粉症、食物アレルギー、薬物アレルギー、蕁麻疹、血管性浮腫、アナフィラキシー、慢性副鼻腔炎、気道アレルギーなど多岐にわたり、診療の中心はかかりつけ医の先生方、総合診療や内科外来を担う先生方により日々支えられている。小児から高齢者まで幅広い患者が相談に訪れ、症状の程度や生活への影響、背景疾患、使用中の薬剤を踏まえた判断が求められる。アレルギー診療は、まさに日常診療のなかにある診療領域である。

一方で、アレルギー診療を取り巻く状況は近年大きく変化している。舌下免疫療法はスギ花粉症やダニアレルギー性鼻炎の治療選択肢として定着し、アナフィラキシーへの対応ではアドレナリン自己注射薬に加えて点鼻製剤も登場した。薬物アレルギーでは即時型反応と遅延型反応を分けて考える必要があり、血管性浮腫では薬剤性やブラジキニン介在性の病態を意識する場面が増えている。さらに、食物アレルギーと交差反応、local allergic rhinitis、アレルゲンコンポーネント特異的IgE抗体検査、生物学的製剤の使い分けなど、診断と治療の考え方も更新されている。

本特集では、日常診療で遭遇するアレルギー関連の臨床について、最近の診断・治療の変化を整理し、外来で確認しておきたいポイントを各領域の先生方にまとめていただいた。読者の先生方が、日々の診療のなかで最新の知見を無理なく取り入れ、患者の不安や疑問により的確に応えるための一助となること、また必要に応じて専門医への相談が適切と判断する際の実用的な手がかりとなれば幸いである。

編集幹事

聖路加国際病院 Immuno-Rheumatology Center /
アメリカアレルギー臨床免疫科専門医 (American Board of Allergy and Immunology : ABAI)

岡田正人